

令和 8 年度病虫害発生予報第 6 号

令和 8 年 9 月 1 日
山梨県病虫害防除所

今月の天気予報

8 月 27 日気象庁発表、1 か月予報による関東甲信地方の向こう 1 か月（予報期間 8 月 29 日～9 月 28 日）の天気は次のとおりです。

暖かい空気に覆われやすいため、向こう 1 か月の気温は高く、向こう 1 か月の降水量および日照時間はほぼ平年並の見込みです。

I 特に注意が必要な病虫害

【果樹】

作物	病虫害名	予想発生時期	予想発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
モモ・スモモ・ネクタリン・オウトウ・ウメ	クビアカツヤカミキリ	—	—	○令和8年7月7日に大月市駒橋地内の公園のサクラにおいて県内で初めて確認され、その後甲州市のモモ・スモモ園地、甲府市のモモ園地においても本種が確認された。 □本種の幼虫は、モモ、スモモ、ウメなどのバラ科樹木の幹や枝の内部を食害し、多発すると樹木を枯死させる恐れがある。繁殖力が高く、一度侵入すると防除が困難であり、果樹生産に大きな被害を及ぼす可能性があるため、早期発見・早期防除が極めて重要である。 ※農業技術課ホームページ https://www.pref.yamanashi.jp/nougyo-gjt/kubiakatsuyakamikiri.html □園地を点検し、疑わしいフラス（幼虫のフンと木くずが混ざったもの）や成虫を発見した場合は、管轄の農務事務所または病虫害防除所に連絡する。 □令和 8 年度病虫害発生予察特殊報第 1 号「クビアカツヤカミキリ」を参考に防除対策を行う。 ※農薬の登録状況については、最新のものを確認すること。 https://www.pref.yamanashi.jp/documents/103/kubiakatuyakamikiri0715.pdf
ブドウ	晩腐病	—	平年並	○8月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○向こう 1 か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みである。 □発病果粒は二次伝染源になるため、見つけ次第除去する。袋をかけてある園でも、発病した果粒が袋内で感染を拡大させるので、発病が見られる場合は改めて見直しの摘粒を行う。 □ブドウ晩腐病防除マニュアル（令和 7 年 3 月発行）、令和 8 年度病虫害防除所情報第 1 号「ブドウ黒とう病・晩腐病防除対策について」を参考に防除対策を行う。 ※農薬の登録状況については、最新のものを確認すること。 https://www.pref.yamanashi.jp/documents/104/boujosyojouhoukokutobanpu.pdf

Ⅱ 各作物の病害虫発生予報

【果樹】

作物	病害虫名	予想 発生時期	予想 発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
ブドウ	べと病	—	平年並	○8月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みである。 □ボルドー液等での定期的な予防散布を実施する。併せて新梢管理（摘心など）を徹底し、副梢等に薬液が付着するように棚上散布も行う。 □発病葉等は伝染源になるため、見つけ次第除去する。 □収穫が終了した園では、収穫後の防除を早め実施する。
	黒とう病	—	平年並	○8月下旬現在、現地ほ場における発生量は平年並である。 ○向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みである。 □発病した新梢や葉、巻きひげは感染源となるため、見つけ次第取り除きは場から持ち出して処分する。 □柔らかい組織は本病に感染しやすいため、遅伸びした新梢や副梢は摘心するなど、新梢管理を徹底する。 □ボルドー液等での定期的な予防散布を実施する。棚の周辺部など農薬のかけ残しがないように十分散布する。
	さび病	—	平年並	○8月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○前年の発生量は、平年並であった。 □ボルドー液による防除を徹底し、収穫後も必ず防除を行う。 □果実袋を使わずにカサかけで栽培した園では、葉裏へのボルドー液の付着が少ないため、収穫後の防除を徹底する。
	チャノキイロ アザミウマ	—	平年並	○8月下旬現在、黄色粘着トラップ（南アルプス市、甲州市）への誘殺数は平年並である。 ○向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みである。 □収穫前の品種や収穫が長引く園では、薬剤の散布間隔が空かないよう収穫前日数等に注意し定期散布を行う。 □新梢先端への寄生が多いので、新梢管理（摘心など）を実施し、棚上からも薬剤を充分散布する。
	クワカバラムシ	—	平年並	○8月下旬現在、県下各地における発生量は平年並である。 □9月に3回目のふ化幼虫が発生するので、収穫期が遅い品種や例年発生が多い園、雨除けハウス（含む簡易雨除け）等では、この時期の防除も徹底する。

【果樹】

作物	病害虫名	予想発生時期	予想発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
モモ	せん孔細菌病	—	平年並	○8月下旬現在、発病葉率は昨年並である。 ○向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みである。 □発病した葉や果実は二次伝染源となるため、速やかに除去する。 □強風や降雨により感染が拡大し、越冬する病原細菌が増える恐れがあるため、防除は台風の接近や前線に伴う降雨前に必ず行う。 □樹冠拡大や骨格枝を育成する若木では、発病枝の剪除を徹底する。 □Ⅲ各病害虫対策、及びモモせん孔細菌病防除マニュアル（令和6年3月発行）を参考に防除対策を徹底する。 ※農薬の登録状況については、最新のものを確認すること。
	モモハモグリガ	—	平年並	○8月下旬現在、フェロモントラップ（韮崎市、山梨市、笛吹市）における誘殺数は平年並である。 □本種は年間の発生回数が多く、密度の上昇も急激なため、発生状況に注意し、薬剤防除を行う □収穫が終わった品種でも発生状況に注意し、防除を徹底する。

※モモハモグリガのトラップ調査結果はこちら

<http://www.pref.yamanashi.jp/byogaichu/92111468716.html>

【果樹全般】

病害虫名	予想発生時期	予想発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
カメムシ類	—	平年並	○8月下旬現在、フェロモントラップ（甲州市）へのチャバネアオカメムシの誘殺数は平年並である。 ○向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みである。 □山間部から果樹園へ飛来するので、夕方から夜間及び早朝に園を見回り発生状況を確認する。 □飛来量は地域やほ場によって差があるので、発生状況に応じて地域ごとに一斉防除を行う。 □令和7年度病害虫発生予察注意報第1号「果樹カメムシ類」を参考に防除対策を行う。 ※農薬の登録状況については、最新のものを確認すること。 https://www.pref.yamanashi.jp/documents/107/r7tyuuihou1kamemushi.pdf
アメリカシロヒトリ	—	平年並	○8月下旬現在、フェロモントラップ（甲斐市）へのアメリカシロヒトリの誘殺数は平年並である。 ○向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みである。 □庭木や耕作放棄地などから収穫後の果樹園へ移動してくることがあるので、葉の食害がないか確認する。 □被害が大きい場合は、収穫後も薬剤散布を行う。

【野菜】

作物	病害虫名	予想 発生時期	予想 発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
抑制 トマト	灰色かび病	平年並	平年並	○8月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みである。 □施設内が多湿にならないように過度な灌水は控え、換気等による施設内の湿度低下に努める。 □早期発見に努め、発病した葉・花弁・果実は除去して施設外に持ち出し処分する。 □前年多発した施設では発生に注意し予防散布に努める。
	葉かび病	平年並	平年並	○8月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みである。 □施設内が多湿にならないように過度な灌水は控え、換気等による施設内の湿度低下に努める。 □多発生すると防除が困難なため、早期発見に努め、初期防除を徹底する。 □発病した葉は伝染源となるため、除去して施設外に持ち出し処分する。 □抵抗性品種でも発病する菌が存在するため、注意して発病の有無を確認する。 □すすかび病と似ており、判断が難しい場合には、防除薬剤は両方に登録のある薬剤を使用する。 □県内で効果の低下がみられる薬剤もあるため、防除薬剤は総合農業技術センター令和4年度成果情報「トマト葉かび病の抵抗性品種に感染する系統の発生および有効薬剤」を参考に防除する。 ※農薬の登録状況については、最新のものを確認すること。 https://www.pref.yamanashi.jp/documents/108010/r4_10_hakabi.pdf
	すすかび病	並 (例年比)	並 (例年比)	○8月下旬現在、巡回ほ場における発生量は例年並である。 ○向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みである。 □施設内が多湿にならないように過度な灌水は控え、換気等による施設内の湿度低下に努める。 □多発生すると防除が困難なため、早期発見に努め、初期防除を徹底する。 □発病した葉は伝染源となるため、除去して施設外に持ち出し処分する。 □葉かび病と似ており、判断が難しい場合には、防除薬剤は両方に登録のある薬剤を利用する。
	疫 病	平年並	平年並	○8月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みである。 □施設内が多湿にならないように過度な灌水は控え、換気等による施設内の湿度低下に努める。 □早期発見に努め、発病した茎葉・果実は除去して施設外に持ち出し処分する。 □窒素過多にならないようにする。

【野菜】

作物	病害虫名	予想 発生時期	予想 発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
抑制トマト	黄化葉巻病	—	平年並	○8月下旬現在、巡回調査において発生は平年並である。 ○8月下旬現在、本病を媒介するタバココナジラミの巡回ほ場（生育初期）での発生量は平年並である。 □媒介虫であるコナジラミ類の防除を徹底する。（コナジラミ類の欄参照） □発病株は見つけ次第抜き取り、ビニール袋に入れて、コナジラミ類を死滅させ、枯らしてから施設外に持ち出し、土中に埋めるなど適切に処理する。
	コナジラミ類	—	平年並	○8月下旬現在、黄色粘着トラップほ場（中央市）におけるコナジラミ類の誘殺量は平年並である。 ○向こう1か月の気温は、高い見込みである。 □ウイルス病を媒介するコナジラミ類の侵入を防ぐため、施設開口部（天窗、側窓、換気扇口等）はすべて0.4mm目以下の防虫ネットを展張する。出入り口は二重カーテンにするなどして侵入を防止するとともに、ネットの隙間や破れ等がないか注意して確認し、不備があった場合は直ちに補修する。 □黄色粘着板を設置してコナジラミ類の発生状況を確認し、発生初期の防除を徹底する。 □同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。 □施設内外の雑草は、コナジラミ類の増殖源となるため、除草を徹底する。また、芽かきした茎葉は適切に処理する。 □ウイルス病の発病株は見つけ次第抜き取り、ビニール袋に入れてコナジラミ類を死滅させ、枯らしてから施設外に持ち出し、適切に処分する。
抑制キュウリ	べと病	平年並	平年並	○8月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みである。 □施設内が多湿にならないように過度な灌水は控え、適湿となるよう換気を行う。 □多発すると防除が難しくなるため、発生初期の防除を徹底し、発病した葉は除去して施設外に持ち出し処分する。
	うどんこ病	平年並	平年並	○8月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みである。 □早期発見に努め、発病した葉・果実は除去して施設外に持ち出し処分する。 □多発すると防除が難しくなるため、予防防除に努める。 □同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。
	灰色かび病	平年並	平年並	○8月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みである。 □施設内が多湿にならないように過度な灌水は控え、適湿となるよう換気を行う。 □早期発見に努め、発病した葉・花卉・果実は除去して施設外に出し、処分する。 □前年多発した施設では発生に注意し予防散布に努める。

【野菜】

作物	病害虫名	予想 発生時期	予想 発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
抑制 キュウリ	褐斑病	平年並	平年並	○8月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みである。 □施設内が多湿にならないように過度な灌水は控え、適湿となるよう換気を行う。 □予防散布を徹底し、発病した葉は早期に除去して施設外に持ち出し処分する。
	アブラムシ類	平年並	平年並	○8月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○向こう1か月の気温は、高い見込みである。 □発生が多くなると防除が困難になるため、発生初期の防除を徹底する。
	ハダニ類	平年並	平年並	○8月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○向こう1か月の気温は、高い見込みである。 □発生が多くなると防除が困難になるため、発生初期の防除を徹底する。 □薬剤抵抗性が発達しやすいため、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。 □葉の裏に多く寄生するため、薬液が葉裏にも十分かかるよう丁寧に散布する。
夏秋 キュウリ	べと病	—	平年並	○8月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みである。 □予防散布に努める。 □早期発見に努め、発病した葉は除去して処分する。
	斑点細菌病	—	—	○8月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みである。 □曇雨天が続くと発生が多くなるため、予防散布に努める。 □病葉は早期に摘み取る。
	うどんこ病	—	平年並	○8月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みである。 □多発すると防除が難しくなるため、予防散布に努める。 □早期発見に努め、発病した葉は除去して処分する。 □同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。
	炭疽病	平年並	平年並	○8月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みである。 □発病後の防除は効果が劣るため、予防散布に努める。 □早期発見に努め、発病した葉は除去して処分する。 □窒素過多は発病を助長するため、施肥量に注意する。
	アブラムシ類	平年並	平年並	○8月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みである。 □発生が多くなると防除が困難になるため、発生初期の防除を徹底する。

【野菜】

作物	病害虫名	予想 発生時期	予想 発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
夏 秋 キュウリ	ハダニ類	—	平年並	○8月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みである。 □発生が多くなると防除が困難になるため、発生初期の防除を徹底する。 □薬剤抵抗性が発達しやすいため、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。 □葉の裏に多く寄生するため、薬液が葉裏にも十分かかるよう丁寧に散布する。
	アザミウマ類	—	平年並	○8月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みである。 □発生が多くなると防除が困難になるため、発生初期の防除を徹底する。 □ほ場周辺の雑草は発生源となるので除草を徹底する。
夏 秋 ナス	褐色腐敗病	—	平年並	○8月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みである。 □台風等により強風を伴う降雨が続くと発生が多くなるため、降雨後の防除を徹底する。 □ほ場の排水性を良好に保つ。 □降雨中に収穫した果実は乾いてから箱詰めする。
	うどんこ病	—	平年並	○8月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みである。 □多発すると防除が難しくなるため、予防散布に努める。 □早期発見に努め、発病した葉は除去して処分する。 □同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。
	ハダニ類	—	並 (例年比)	○8月下旬現在、巡回ほ場における発生量は例年並である。 ○向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みである。 □発生が多くなると防除が困難になるため、発生初期の防除を徹底する。 □薬剤抵抗性が発達しやすいため、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。 □葉の裏に多く寄生するため、薬液が葉裏にも十分かかるよう丁寧に散布する。
	アザミウマ類	—	並 (例年比)	○8月下旬現在、巡回ほ場における発生量は例年並である。 ○向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みである。 □発生が多くなると防除が困難になるため、発生初期の防除を徹底する。 □ほ場周辺の雑草は発生源となるので除草を徹底する。

【野菜】

作物	病害虫名	予想 発生時期	予想 発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
夏 秋 ナス	ハスモンヨトウ	—	平年並	○8月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○8月下旬現在、夏秋ナスほ場（甲府市、笛吹市）におけるフェロモントラップへの誘殺数は平年並である。 ○向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みである。 □作業の際にはほ場内をよく観察し、卵塊やふ化後分散する前の若齢幼虫を見つけ次第捕殺する。 □老齢幼虫には薬剤の効果が低いので、若齢幼虫のうちに早期防除を徹底する。
	オオタバコガ	—	平年並	○8月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○8月下旬現在、夏秋ナスほ場（甲府市、笛吹市）におけるフェロモントラップへの誘殺数は平年並である。 ○向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みである。 □平坦地では、例年9月上旬から第三世代成虫が発生する。成虫の発生後は産卵と幼虫が見られるため、幼虫の食害痕や虫ふんを目安に早期発見に努め、若齢幼虫のうちに防除を徹底する。
キ ャ ベ ツ ・ ア ブ ラ ナ 科 野 菜	黒腐病	—	平年並	○8月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みである。 □台風、大雨の後に発生が多いため、防除を徹底する。 □予防散布を徹底する。 □収穫後の残さは丁寧にかたづけ、焼却処分する。
	菌核病	—	平年並	○8月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みである。 □曇雨天が続くと発生が多いため、防除を徹底する。 □予防散布を徹底する。 □発病株は早期に除去する。
	コナガ	—	平年並	○8月下旬現在、巡回ほ場（鳴沢村）における発生量は平年並である。 ○8月下旬現在、キャベツ（鳴沢村）定点調査ほ場におけるフェロモントラップへの誘殺数は平年並である。 ○向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みである。 □薬剤抵抗性が発達しやすいため、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。
	アブラムシ類	—	平年並	○8月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みである。 □発生が多くなると防除が困難になるため、発生初期の防除を徹底する。

※ハスモンヨトウ、オオタバコガ、コナガのトラップ調査結果

<http://www.pref.yamanashi.jp/byogaichu/00035185449.html>

【野菜】

作物	病害虫名	予想発生時期	予想発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
イチゴ	炭疽病	平年並	平年並	○ 8月下旬現在、現地ほ場における発生量は平年並である。 ○ 向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みである。 □ 苗による本ぼへの持ち込みを防ぐため、育苗中は予防散布を徹底する。 □ 発病株は感染源になり、降雨やかん水により急速に蔓延するため、発病が確認された株は直ちに抜き取って適切に処分する。 □ 窒素肥料の多用は発生を助長するため、適正な肥培管理に努める。
	ハダニ類	平年並	平年並	○ 8月下旬現在、現地ほ場における発生量は平年並である。 ○ 向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みである。 □ 発生が多くなると防除が困難になるため、発生状況に注意し、発生初期の防除を徹底する。 □ 薬剤抵抗性が発達しやすいため、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。 □ 葉の裏に多く寄生するため、薬液が葉裏にも十分かかるよう丁寧に散布する。

【野菜全般】

病害虫名	予想発生時期	予想発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
うどんこ病	—	平年並	○ 8月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○ 向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みである。 □ 多発すると防除が難しくなるため、予防散布に努める。 □ 早期発見に努め、発病した葉は除去して処分する。 □ 同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。
アブラムシ類	—	平年並	○ 8月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○ 向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みである。 □ 発生が多くなると防除が困難になるため、発生初期の防除を徹底する。
ハダニ類	—	平年並	○ 8月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○ 向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みである。 □ 発生が多くなると防除が困難になるため、発生初期の防除を徹底する。 □ 薬剤抵抗性が発達しやすいため、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。 □ 葉の裏に多く寄生するため、薬液が葉裏にも十分かかるよう丁寧に散布する。

【野菜全般】

病害虫名	予想発生時期	予想発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
ハスモンヨトウ	—	平年並	○8月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○8月下旬現在、ナス（甲府市、笛吹市）の各定点調査ほ場におけるフェロモントラップへの誘殺数は平年並である。 ○向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みである。 □老齢幼虫には薬剤の効果が低いので、若齢幼虫のうちに早期防除を徹底する。 □卵塊や分散前の若齢幼虫を発見したら速やかに捕殺する。
オオタバコガ	—	平年並	○8月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○8月下旬現在、定点調査ほ場（甲府市、笛吹市、鳴沢村）におけるフェロモントラップへの誘殺数は平年並である。 ○向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みである。 □例年9月上旬から第三世代成虫が発生する。成虫の発生後は産卵と幼虫が見られるため、幼虫の食害痕や虫ふんを目安に早期発見に努め、若齢幼虫のうちに防除を徹底する。
アザミウマ類	—	平年並	○8月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みである。 □発生が多くなると防除が困難になるため、発生初期の防除を徹底する。 □ほ場周辺の雑草は発生源となるので除草を徹底する。 □施設の場合、侵入防止のため施設開口部に防虫ネットを設置する。

※ハスモンヨトウ、オオタバコガのトラップ調査結果

<http://www.pref.yamanashi.jp/byogaichu/00035185449.html>

【水稲】

病害虫名	予想発生時期	予想発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
いもち病 (穂いもち)	—	平年並	○8月下旬現在、定点調査ほ場（中北・峡南・富士東部地域）における発生量は平年並である。 ○向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みである。 □コシヒカリなどの耐病性の低い品種では、発生状況に注意し、防除を徹底する。 □前年、発生が多かったほ場や、育苗期に発生が見られたほ場では、穂ばらみ初期から乳熟期にかけて薬剤防除を行う。
もみ枯細菌病	—	平年並	○8月下旬現在、定点調査ほ場（中北・峡南・富士東部地域）における発生量は平年並である。 ○向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みである。 □前年、発生が多かったほ場や、育苗期に発生が見られたほ場では、穂ばらみ初期から乳熟期にかけて薬剤防除を行う。

※水稲いもち病の定点調査結果

http://www.pref.yamanashi.jp/byogaichu/sakumotu_kikka.html

【水稲】

病害虫名	予想発生時期	予想発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
ツマグロヨコバイ	—	平年並	○8月下旬現在、定点調査ほ場（中北・峡南・富士東部地域）における発生量は平年並である。 □成虫及び老齢幼虫が株あたり30頭程度寄生している場合は、直ちに追加散布を行う。
ウンカ類 (セジロウンカ ヒメトビウンカ トビロウンカ)	—	平年並	○8月下旬現在、定点調査ほ場（中北・峡南・富士東部地域）における発生量は平年並である。 ○気象予報データを用いたウンカ飛来予測によると、8月の飛来予測回数は平年よりも少ない。 □今後の予察情報と発生状況に注意する。
斑点米カメムシ類 (クセハカメムシ アカヒゲホソミドリ カスミカメ ホリハカメムシ イナカメムシ)	—	平年並	○8月下旬現在、定点調査ほ場（中北・峡南・富士東部地域）における発生量は平年並である。 ○向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みである。 □穂揃期とその7～10日後の2回の薬剤散布を基本とするが、その後も発生が続く場合には追加散布を行う。また、畦畔及び畦ぎわの防除も効果が高いので、あわせて実施する。 □畦畔・本田を十分に観察して発生状況を確認し、防除が遅れないように注意する。 □令和7年度病害虫防除所情報第4号「斑点米カメムシ類の防除対策について」を参考に防除対策を行う。 ※農薬の登録状況については、最新のものを確認すること。 https://www.pref.yamanashi.jp/documents/104/boujosyojouhou4-1.pdf

【大豆】

病害虫名	予想発生時期	予想発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
莢害虫類	—	平年並	○8月下旬現在、巡回調査ほ場（中北・峡南地域）の発生量は平年並である。 ○向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みである。 □着莢期以降10～15日間隔で3回程度、莢に十分かかるよう薬剤散布を行う。
カメムシ類	—	平年並	○8月下旬現在、巡回調査ほ場（中北・峡南地域）の発生量は平年並である。 ○向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みである。 □着莢期以降10～15日間隔で2～3回、莢に十分かかるよう薬剤散布を行う。

Ⅲ 各病害虫対策

【ブドウの黒とう病対策】

発病した新梢や葉は今年の伝染源となるだけでなく、そのままにしておくと越冬して翌年の伝染源となるため、見つけ次第丁寧に取り除き、ほ場から持ち出して適切に処分する。

シャインマスカットなど、本病に弱い品種は特に重点的に観察し、罹病部の除去を徹底すること。

【モモせん孔細菌病・スモモの黒斑病対策】

秋雨や台風による感染拡大を防ぐため、9月中旬～10月上旬の間に下表の薬剤を散布する。

作物名	散布薬剤
モモ	ICボルドー412（30倍）または4-12式ボルドー液を、2週間間隔で2回散布する。甚大な被害がでた地域は2週間間隔で3回必ず散布する。 細菌は強風に伴う雨で広く拡散するため、防除は台風の接近や前線に伴う降雨前に必ず行う。なお、住宅隣接園ではICボルドー412（30倍）または4-12式ボルドー液にかえて、ムッシュボルドーDF（500倍）加用クレフノン（100倍）を用いる。ただし、葉害が発生するおそれがあるため、高温時の散布は避ける。
スモモ	ICボルドー412（30倍）を散布する。細菌は強風に伴う雨で広く拡散するため、防除は台風の接近や前線に伴う降雨前に必ず行う。

【モモ・スモモ・オウトウのカイガラムシ対策】

○カイガラムシ類（[ウメシロカイガラムシ](#)、[ナシマルカイガラムシ](#)）

9月は、3回目の幼虫発生時期にあたるので、枝や幹にいていねいに薬剤防除を行う。

【サツマイモ基腐病対策】

近年、九州地域のサツマイモ産地において発生が確認され、被害地域の拡大が見られている。発病すると地際部から茎が枯れ、いもが腐敗する症状を引き起こすことにより、大幅な減収を生じる。本県での発生は確認されていないが、被害の蔓延を防ぐため、栽培期間中は、ほ場観察を通じて本病の早期発見に努め、発病株はほ場外に持ち出して適切に処分する。

本病の防除に関する詳細な技術対策については、農研機構のHPに掲載されている、以下のマニュアルを参照とする。

「サツマイモ基腐病の発生生態と防除対策（令和4年度版）」

https://www.naro.go.jp/publicity_report/publication/files/stem_blight_and_storage_tuber_rot_of_sweetpotator04.pdf

IV その他

【総合防除について】

- ・総合防除とは、予防、判断、防除のプロセスにおいて、耕種的・物理的・生物的・化学的防除などの多様な手法を組み合わせることで、環境負荷を軽減し、化学農薬を適正に使用しつつ、病虫害や雑草の発生を経済的な被害が生じるレベル以下に抑制する手法です。
- ・農林水産省では、農業者による適切な総合防除の実践を促進するためのマニュアルを作成しています。下記の URL をご参照のうえ、総合防除の推進にご活用をお願いします。

(参考)

農林水産省ホームページ 「総合防除 (IPM) の推進について」

https://www.maff.go.jp/j/syouan/syokubo/gaicyu/g_ipm/

農林水産省 総合防除実践マニュアル (令和 8 年 3 月)

https://www.maff.go.jp/j/syouan/syokubo/gaicyu/g_ipm/attach/pdf/index-44.pdf

【農薬危害防止運動について】

6 月から 9 月は「農薬危害防止運動」実施期間です。農薬を使用するときは次の事項に注意して下さい。

- (1) 毒物又は劇物に該当する農薬だけでなく、すべての農薬について、安全な場所に施錠して保管するなど、保管管理には十分注意する。
- (2) 農薬の調製又は散布を行うときは、ゴム手袋、マスク等の防護装備を着用し、取扱を慎重に行う。
- (3) 公共施設や住宅地等に隣接する農地においては、農薬による健康被害が生じないよう風向きやノズルの向き等に十分注意し、農薬の飛散防止に努める。

(参考) 住宅地等における農薬使用について

農林水産省ホームページ https://www.maff.go.jp/j/nouyaku/n_tekisei/jutakuti/

- (4) 水田において農薬を使用するときは、止水に関する注意事項を遵守し、河川の汚染の防止等、環境の保全に努める。
- (5) 農薬の廃液や散布器具を洗浄した水が、河川や水路等に流れ出さないようにする。
- (6) 農薬やその希釈液、残渣等を飲食品の空容器等へ移替えしない。
- (7) 農薬の空容器、空袋等の処理は、廃棄物処理業者に処理を委託するなど、適切に行う。

【熱中症対策について】

- ・作業は涼しい時間帯に行うなど熱中症に十分注意してください。

(参考) 熱中症予防対策強化期間のお知らせ

県ホームページ <https://www.pref.yamanashi.jp/kenko-zsn/kenkozukuri/h2510nechusyou.html>

連 絡 先

山梨県病虫害防除所 (山梨県総合農業技術センター調査部)

TEL 0551-28-2941

Eメール byogaichu@pref.yamanashi.lg.jp

インターネット

山梨県病虫害防除所ホームページ

予報対象作物を中心に「トラップ調査結果」「病虫害写真」等を掲載しています。

アドレス <https://www.pref.yamanashi.jp/byogaichu/>